

ヨハネによる福音書4章1-26節 「いつまでも渴かない水」

1A サマリアを通られたイエス 1-6

1B パリサイ人を避けるイエス 1-3

2B 正午の井戸 4-6

2A 生ける水 7-15

1B 付き合いのないサマリア人 7-9

2B 永遠のいのちへの水 10-15

3A 夫に求めていた命 16-18

4A まことの礼拝者たち 19-24

1B ユダヤ人から来る救い 19-22

2B 御霊とまことの礼拝 23-24

5A 一切を知らせるメシア 25-26

本文

ヨハネによる福音書 4 章を開いてください。私たちは、午前と午後の二回かけて、4 章全体を読んできたいと思います。午前は前半部分、1 節から 26 節、午後は後半、27 節以降を見てください。

1A サマリアを通られたイエス 1-6

1B パリサイ人を避けるイエス 1-3

1 パリサイ人たちは、イエスがヨハネよりも多くの弟子を作ってバプテスマを授けている、と伝え聞いた。それを知るとイエスは、2 ——バプテスマを授けていたのはイエスご自身ではなく、弟子たちであったのだが——3 ユダヤを去って、再びガリラヤへ向かわれた。

私たちは、2 章の後半から、イエス様と弟子たちの一行がエルサレムにいるのを見ました。過越の祭りを守るために、エルサレムに行き、そこで多くのしるしをイエス様が行われました。そして、ユダヤ人の指導者でパリサイ人であった、ニコデモがイエス様のところに夜に来て、「3:2 あなたが神のもとから来られた教師であることを知っています。」と言いました。ところがイエス様は、「新しく生まれなければ、神の国を見ることはできません。」と、はっきりと言われました。そしてエルサレムから離れ、ユダの荒野の方に行かれて、そこでバプテスマを授けていました。そしてその話が、パリサイ人たちの耳に入ったので、パリサイ人たちは既にイエス様の働きを疑い、反対する動きさえあったので、それで対立を避けて、彼らの家があるガリラヤに再び向かいます。

そして次に出てくるのが、サマリア人の女です。使徒ヨハネは、間違いなくエルサレムにいたニ

コデモと、次に出てくるサマリアの女を対比していたことでしょう。片や、宗教者であり、指導者であり、誠実な人です。その人がイエス様に近づいて、イエス様を評価したのに、イエス様は、「あなたは、神の国を見ることはない」と言われて、これから見るサマリアの女は、ふしだらな人ですが、イエス様のほうから近づき、自らがキリスト、救い主であることを明かされます。ここに、福音のパラドックス、逆説があります。きちんとした人、まじめな人、知識のある人こそが、神に近く、救われる資格があるように見えますが、その反対であることが多いです。そして、ふしだらな人、身分の低い人、嫌われている人は、救いから離れているように見えますが、実はそういう人に神は救いを与えられます。これから見るのは、人々からは嫌われ、憎まれているかもしれない人が、実は神の救いに近いのだという希望を見ます。

2B 正午の井戸 4-6

4 しかし、サマリアを通過して行かなければならなかった。

サマリアは、エルサレムから南に広がるユダヤ地方と、イスラエル北部のガリラヤ地方の間にある地域です。今のヨルダン川西岸がそれに当たります。ですから、この言葉は、ユダヤからガリラヤに行く途中にある地域として、そこを行かなければいけなかったという、何の変哲もない、当たり前の言葉のように聞こえます。実は、とても大切な意味を含んでいるのです。

9節をご覧ください、後半に「ユダヤ人はサマリア人と付き合いをしなかったのである。」とあります。ユダヤ人が、ユダヤとガリラヤを行き来する時、サマリアは通過地点ではなかったのです。ヨルダン川沿いの南北に走る平野まで迂回して、旅をしました。地理的にはサマリアを通れば最短距離なのですが、それをしなかったのです。理由は、ユダヤ人とサマリア人の間に強い確執があったのです。

サマリア人の始まりは、紀元前 722 年に起こったアッシリア捕囚です。北からアッシリアが攻めてきて、北イスラエルの人々の多くが捕え移されました。アッシリアは、自分たちが征服した民を互いに移住させる政策を取っていました。イスラエルの人々が他の地域に捕え移されましたが、その北イスラエルの所に他の非征服民が移り住みました。そこで残されていたイスラエル人と異邦人が結婚するようになり、混血の子供が生まれました。これがサマリア人です。さらに元来のユダヤ教に異邦人の宗教が混合されたものが始まりました。したがって、民族的にも宗教的にも純粹ではないサマリア人を、ユダヤ人は嫌うようになったのです。

サマリア人もユダヤ人を嫌うようになりました。南ユダの人々は、紀元前 586 年にバビロンによって捕え移され、70 年後、ペルシアがバビロンを倒した後に帰還します。そしてエルサレムの町の再建を始めたのですが、その時にサマリア人がやってきて「いっしょに再建をしたい」と申し出たのです。けれども、帰還したユダヤ人はきっぱりと断りました。自分たちが、異なる神々を拝んだため

に神から裁かれて、捕囚の民という悲惨な目になったということを痛く感じていました。だから、今度こそは主なる神のみに仕えるという決心をもってエルサレムに戻ってきたのです。それできっぱりと断ったところが、今度はサマリア人が怒りまくり、その工事を阻止するようになり、一時中断させることまでしたのです(エズラ 4:1-4、ネヘミヤ 4:1-3)。

ですから、民族的な確執、宗教的な確執、そして歴史的な確執があり、その当時に至りました。そこでユダヤ人がサマリアの地域を通過するなら、サマリア人から唾をはきかけられた程だったのです。ですから、ここイエス様が、「サマリアを通過して行かなければならなかった。」の「ならなかった」とは、特別な意味があるのです。それは、たった一人の女にお会いになるためです。

5 それでイエスは、ヤコブがその子ヨセフに与えた地所に近い、スカルというサマリアの町に来られた。6 そこにはヤコブの井戸があった。イエスは旅の疲れから、その井戸の傍らに、ただ座っておられた。時はおよそ第六の時であった。

スカルは、旧約聖書の「シェケム」という町の近郊にありました。ユダヤ人の父祖にアブラハム、その子イサク、そしてその子ヤコブがいますが、ヤコブがかつてこの町の地所を買い取っていました(創世記 33:19)。今のパレスチナ自治区、ナブルスが聖書時代のシェケムです。

そして「時はおよそ第六の時であった。」というのも、大切な言葉になります。今の時間帯に直すと正午です。大抵、女性たちは昼下がりに井戸に来ます。夕食の準備などするためですが、そこで文字通り「井戸端会議」を行なうのです。ところがこの女は正午に水を汲みに来ています。他の女性たちを避けていることば明らかです。18 節を見ますと、イエス様がこの女がこれかで五回結婚をしており、今の同棲の男性とは結婚もしていないことを指摘されます。そう彼女は不道德な女、ふしだらな女だったのです。

あと、「旅の疲れから」というのも興味深いですね。イエス様は私たちとまったく同じ肉体を持っておられました。疲れることもあれば、喉が渇くこともあります。主は、私たちの弱さに同情できない方ではなく、罪は犯されませんが、すべての点で、私たちと同じように、試みに会われました(ヘブル 4:15)。そして、旅の疲れという否定的に見えるようなことを用いて、福音を語るようにされました。私たちも、自分の弱さ、不都合な状態があっても、むしろそれが神の御心を行うために備えられていることもあるのです。

2A 生ける水 7-15

1B 付き合わないサマリア人 7-9

7 一人のサマリアの女が、水を汲みに来た。イエスは彼女に、「わたしに水を飲ませてください」と言われた。8 弟子たちは食物を買いに、町へ出かけていた。9 そのサマリアの女は言った。「あな

たはユダヤ人なのに、どうしてサマリアの女の私に、飲み水をお求めになるのですか。」ユダヤ人はサマリア人と付き合いをしなかったのである。

イエス様は女に声をかけられました。本当に喉が渴いていたとは思いますが、あくまでも話のきっかけを作るためです。弟子たちが、ちょうど、食べ物を探しに町に出かけています。ですから、ここでは本当に、ヤバイ状況だったと思います。先に話したように、ユダヤ人とサマリア人は付き合いません。そして、男性が女性に声をかけていますが、当時は公の場でそういうことをすることは、ありませんでした。しかもイエス様はユダヤ人のラビでもあり、ラビが女に話しかけるなんて、もう考えられません。しかも、「水を飲ませてください」と、借りを作って頼んでいるのです。

私たちの生きている社会には、壁があります。男と女にある社会的な壁、ユダヤ人とサマリア人にあるような民族や国の間にある確執、それにとまなう壁があります。けれども、キリストの福音は、それらを壊しながら人々の心に届きます。

2B 永遠のいのちへの水 10-15

10 イエスは答えられた。「もしあなたが神の賜物を知り、また、水を飲ませてくださいとあなたに言っているのがだれなのかを知っていたら、あなたのほうからその人に求めていたでしょう。そして、その人はあなたに生ける水を与えたことでしょう。」

イエス様は、「水」を使って、永遠の命について語っておられます。神の賜物とは永遠の命です。そして、ご自身が誰なのか？と言えば、救い主です。この方の名によって、「生ける水」、すなわち、永遠の命が与えられるのです。生ける水とは、ユダヤ人には、「動いている水」ということです。水が留まっていれば、それは淀みます。それは死んでいるとみなされます。ところが、動いているということは、生きているということです。

11 その女は言った。「主よ。あなたは汲む物を持っておられませんし、この井戸は深いのです。その生ける水を、どこから手に入れられるのでしょうか。12 あなたは、私たちの父ヤコブより偉いのでしょうか。ヤコブは私たちにこの井戸を下さって、彼自身も、その子たちも家畜も、この井戸から飲みました。」

今のナブルス、当時のシェケムまたスカルに行くと、ヤコブの井戸と呼ばれている井戸が、教会の中にあります。水深は 30 呎です。相当、深いです。そして、この女はユダヤ人のイエス様を見下しています。「私たちの先祖ヤコブよりも偉いのでしょうか」と言っています。サマリア人は、サマリア人なりに自分たちの歴史と宗教に誇りを持っていました。イスラエルの父祖アブラハムやヤコブの族長は北イスラエルの地域で、神に出会っています。サマリア人は、聖書の最初の五冊「モーセ五書」と呼ばれるものは信じていました。けれども、神の箱がシロという町からペリシテ人に奪

い取られ、そしてダビデがエルサレムに移したというのは、自分たちで勝手に行なったと考えて、ユダヤ人たちは勝手にやっていると考えていたのです。

13 イエスは答えられた。「この水を飲む人はみな、また渇きます。14 しかし、わたしが与える水を飲む人は、いつまでも決して渇くことはありません。わたしが与える水は、その人の内で泉となり、永遠のいのちへの水が湧き出ます。」

ここは、3章の「水と御霊によって生まれなければ、神の国にはいることはできません」という言葉と同じように、肉体的な渇きと霊的な渇きの違いを語られている所です。「この水」つまり物理的な水を飲めば、「また渇く」と主は言われます。当たり前ですね。夏の暑いときに冷たいコーラを飲んだら爽やかな気分になりますが、しばらくするとまた喉が渇きます。けれども、これは霊的にも同じなのです。「神への渇き、心の渇きを、他の物質的なもので満たそうとしても、決して満たすことはできない。また渇いてしまう。」ということです。

人間は誰でも、「神への渇き」があります。「詩 42:1-2 鹿が谷川の流れを慕いあえぐように神よ私のたましいはあなたを慕いあえぎます。私のたましいは神を生ける神を求めて渇いています。いつになれば私は行って神の御前に出られるのでしょうか。」数学者のパスカルは、「すべての人間の心には、神にしか埋められない空洞がある」と言いました。神からしか満たされるとは思っていない人間は、それを物質的なもので何とかして満たそうとしているのです。ある人はお金もうけであったり、ある人はカッコイイ車であったり、女の方はファッションや彼氏であったり、とにかく目に見えるもので満たそうとするのです。

けれども、一度、それを獲得した瞬間から再び、何か満たされない思いが戻ってきます。それで、もっと刺激的なこと、もっと興奮するようなこと、もっと何かを求めて、追及するのです。私たちは金持ちや、芸能人など華々しい仕事をしている人々をあこがれますが、実は彼らこそ一番空しく、孤独な人たちであることを知っているのでしょうか。でも、それとは対照的に、「わたしが与える水を飲む人は、いつまでも決して渇くことはありません。」とイエスは言われます。内側で泉となり、永遠のいのちの水が湧き出るので。

15 彼女はイエスに言った。「主よ。私が渇くことのないように、ここに汲みに来なくてもよいように、その水を私に下さい。」

女は、イエス様が語られていることが、物理的な水のことだと思っています。イエス様が不思議な水の湧き出る壺でも持っていて、それを私にください、とお願いしているのです。初めから、どれだけ話が食い違っているのか、分かると思います。イエス様は、御霊についてことを語られているのに、女は物理的なことを語っているのですから。そこでイエス様は、がらっと話題を変えられます。

3A 夫に求めていた命 16-18

16 イエスは彼女に言われた。「行って、あなたの夫をここに呼んで来なさい。」17 彼女は答えた。「私には夫がいません。」イエスは言われた。「自分には夫がない、と言ったのは、そのとおりです。18 あなたには夫が五人いましたが、今一緒にいるのは夫ではないのですから。あなたは本当のことを言いました。」

分かりますか、この女は、神への飢え渴きを男との関係で満たそうとしていました。表向きは非常にふしだらな女なのですが、それだけ霊的に枯渇していることを如実に表していました。この人と一緒になれば、何か幸せになれるかもしれない。そうやって五回裏切られ、ついに結婚そのものに失望し、結婚せずに同棲していたのです。本当に私たちは分かりません、神から離れた罪の生活をしているな、と思っている、実はそれは神の救いを求めるのに近いです。

次に、この女は、「あなたは預言者だとお見受けします。」と認めます。普通の生活をしているように振舞っていたのですが、このように仮面が剥がれたのです。私たちも実は、このような仮面をかぶっています。人々と出会う時は、普通に挨拶をし、周囲の人とも普通に会話しています。私は近所の人が「私たちは普通の家族です」と自分のホームページで紹介しているのを読みました。けれども、実は最近離婚したばかりで、またすぐに再婚をした人であり、その子供が精神不安定になっていることを私は知っていました。私たちには、人には知られてほしくない何かを持っています。イエス様はそこの部分をわたしに明け渡しなさい、と招いてくださっているのです。

4A まことの礼拝者たち 19-24

1B ユダヤ人から来る救い 19-22

19 彼女は言った。「主よ。あなたは預言者だとお見受けします。20 私たちの先祖はこの山で礼拝しましたが、あなたがたは、礼拝すべき場所はエルサレムにあると言っています。」

目の前にある井戸の話から、彼女の人生の深い部分の話をイエス様がされていることに彼女は気づきました。そこで、彼女が次に持ち出した質問は、宗教や神学のことについてです。「**私たちの先祖**」すなわちサマリア人は、ゲリジム山というところで礼拝を捧げています。シェケムの町のすぐ横にあります。ゲリジム山の向かいにエバル山がありますが、かつてヨシュア率いるイスラエルが約束の地に入った時に、この二つの山に上って、モーセの律法に記された神の祝福と呪いを宣言しました(申命 27:11-26)。けれども先ほど説明したように、ダビデ王は神の箱をエルサレムに移し、そしてその子ソロモンは、エルサレムに神殿を建てました。そこにわたしは自分の名を置くと主は語られたのです。

それで彼女は混乱しているのです。宗教的な、神学的な意見の違いで彼女は、真理がどこにあるのか分からないでいたのです。数多くの人が、宗教上の違い、神学の見解の違いで対立がある

ところで、混乱していることが多いのです。宗教や神学の違いで、人が神のところにいけなくなっているということは、多いのです。

21 イエスは彼女に言われた。「女の人よ、わたしを信じなさい。この山でもなく、エルサレムでもないところで、あなたがたが父を礼拝する時が来ます。22 救いはユダヤ人から出るので、わたしたちは知って礼拝していますが、あなたがたは知らないで礼拝しています。

イエス様は、確かにエルサレムのシオンの山が、神が選ばれたところであり、サマリア人はそれを知らないと言われています。けれども、ユダヤ人がシオンの山で礼拝を捧げているからと言って、彼らは本当に神を礼拝しているのかと言うと違う、とイエス様は言われているのです。

いかがでしょうか、これを仏教とキリスト教に当てはめてみましょう。仏教とキリスト教のどちらが正しいかと私が聞かれたら、私はもちろんキリスト教であると答えます。悟りによっては、救いを得ることはできません。また悟りを得て、究極の平安な状態、涅槃に至ること自体、人間の努力では絶対に無理だし、どの仏教徒も涅槃の領域に入ったと言う人はいません。では、キリスト教の教会に通っている人が本当に礼拝を捧げていると言えば、違うのです。教会に物理的に来ても、真に礼拝しているのではないのです。キリスト教か仏教かではありません。イエス・キリストか、そうでないかなのです。

2B 御霊とまことの礼拝 23-24

23 しかし、まことの礼拝者たちが、御霊と真理によって父を礼拝する時が来ます。今がその時です。父はそのような人たちを、ご自分を礼拝する者として求めておられるのです。24 神は霊ですから、神を礼拝する人は、御霊と真理によって礼拝しなければなりません。」

イエス様は、御霊によって永遠の命を得ることを、いろいろな言い方をして説明しておられます。新しく生まれるということ、また生ける水を飲むということ。ここでは、御霊と真理によって礼拝するということです。神は霊です。だから神と関わるには、私たちの霊が生きていないといけません。霊の部分において、私たちは神と関わること、交わることができます。そして、真理によって礼拝します。神の御言葉に示されている真理によって礼拝するのです。

5A 一切を知らせるメシア 25-26

25 女はイエスに言った。「私は、キリストと呼ばれるメシアが来られることを知っています。その方が来られるとき、一切のことを私たちに知らせてくださるでしょう。」

ついに彼女は核心に迫りました。「キリストと呼ばれるメシア」です。先ほどイエス様のことを、「あなたは預言者だと思います」と言いましたが、今はメシアのことを話しています。

そして彼女の驚くべき発言は、「一切のことを私たちに知らせてくださる」というものです。当時のユダヤ人は、メシアであれば軍事的な救世主を求めていました。ローマの圧制の中で苦しんでいる私たちを武力で救い出し、そしてユダヤ人を中心とする神の国を建ててくださる方だと思っていました。けれども実は、このサマリアの女、しかもふしだらとされている女の口から、メシアについての正しい知識が出てきたのです。自分についての一切のこと、また自分だけでなく、この世界についてのすべてのことを明らかにしてくださる方、神についてのすべてを示してくださる方、これがメシアであると話したのです。

皆さんにも、このような啓示が神の御霊によって与えられることをお祈りします。私たちがキリストの知識に至るのに、どんなに努力しても無理であることを前回、3章の学びでお話しました。聖書を丸暗記しているイスラエルの教師が、新しく生まれることについて信じるができなかったのです。神の知識は、このように、ふとしたことから始まります。それは自分の努力で得たものではなく、外側から、つまり神から与えられたものなのです。

26 イエスは言われた。「あなたと話しているこのわたしがそれです。」

これは福音書を読んでいる人は、驚くべきイエス様の発言であることを知っています。ここまではっきりと、ご自分がメシアである、キリストであることを発言されている箇所はないからです。ユダヤ人指導者に対しては、2章で学んだように、ぼかして話しておられました。信仰がないどころか、敵対的であったからです。そして弟子たちに対しても、ピリポ・カイザリアというところで、弟子たちだけになったとき、ペテロが「あなたは生ける神の御子キリストです」と言ったのを、「その啓示は天の父から来たのです。幸いです。」と認められたのです(マタイ 16:16-17 参照)。

このようにして、私たちはサマリアの女に近づき、ご自身をメシアとまで明かすところを読みました。このようにして、自分が捜しているのではなく、神がキリストにあってあなたを捜しておられます。そして、自分は神からほど遠いところに生きていると思っているかもしれませんが、実は、自分の人生で最も否定的なところに、神はそこにおられるかもしれません。